

# フィロンの正義理解

原 口 尚 彰

はじめに

1. 正義（義）の概念
  - 1.1 ギリシア・ローマ世界における正義（義）
  - 1.2 旧約聖書における正義（義）
  - 1.3 初期ユダヤ教における正義（義）
2. フィロンにおける正義（義）
  - 2.1 語学的分析
  - 2.2 正義（義）の源としての神
  - 2.3 賢人としての義人
  - 2.4 徳としての正義（義）
  - 2.5 敬虔と正義（義）
  - 2.6 正義（義）と人類愛
3. 結論

はじめに

一世紀のユダヤ人哲学者アレクサンドリアのフィロンは、モーセ五書の哲学的注解書を沢山残している。彼は敬虔なユダヤ教徒であると同時にギリシア・ローマ世界の教養を身に付け、ヘレニズム哲学に造詣が深かった。彼の思想には旧約・ユダヤ教的要素とギリシア的な要素が見られ、両者が分かちがたく結び付いている。

今回は特に、フィロンの正義の理解についての分析を通して、彼の説く倫理思想が創造主なる神への信仰と神が付与した律法に基づきながらも、徳の実現を目指すギリシア・ローマ世界の倫理思想によってより普遍化されていることを、フィロンの著作の語学的・文献学的分析を通して実証する。正義（義）は神の創造の秩序の根本原理であると共に、神が与えた律法を貫く指導理念の一つである。他方、正義（義）は思慮、自制、勇気、敬虔等と共に実践すべき主要な徳目の一つとして、ヘレニズム哲学が説く倫理教説が目指す理想と一致することを、彼はモーセ五書の哲学的解釈によって示そうとするのである。

## 1. 正義（義）の概念

### 1.1 ギリシア・ローマ世界における正義（義）

正義（義）の概念は、ギリシア語でディケー（δικη）またはその派生語の形容詞ディカイオス（δικαιος）

や名詞ディカイオシュネー (δικαιοσύνη) によって表現される。ディケーは「定め」、「慣例」を意味するが (ホメロス『オデュッセイア』19.43)、人間の行為に適用されれば、「正義」という意味になる (『イリアス』16.388; 『オデュッセイア』14.84; アISKYロス『アガメムノン』259; プラトン『法律』876e他)<sup>1</sup>。法的な文脈で使用されれば、この言葉は「裁判」(アリストテレス『ニコマコス倫理学』1134a)、「判決」(ホメロス『イリアス』18.508; 『オデュッセイア』3.244; ヘシオドス『労働と日々』219)、或いは、「刑罰」という意味になる (ヘロドトス『歴史』9.60.2)<sup>2</sup>。

派生語ディカイオス (「義しい」、「正しい」) は規範に適っている状態や行為を指す形容詞で (『イリアス』11.832; 『オデュッセイア』6.120; ヘロドトス『歴史』9.60.2)、名詞化されて「正義」という意味でも使用される (ヘロドトス『歴史』1.96.2; クセノフォン『アナバシス』7.7.14)<sup>3</sup>。ディカイオシュネーはディカイオスの名詞形であり、人間の社会的行為における「正義」、「義」という意味で使用される (ヘロドトス『歴史』1.96.2; プラトン『国家』433a; アリストテレス『政治学』1291a)<sup>4</sup>。

ギリシア・ローマ世界において正義の問題にまとまった倫理的考察を与えたのが、哲学者のプラトンであり、『国家』における正義の問題についての議論は (特に、第4巻6—10章)、以後の理論的考察の出発点となっている。プラトンの正義論を継承発展させたのが、その弟子のアリストテレスであり、正義論は『ニコマコス倫理学』の中心的主題の一つとなっている (特に、第5巻を参照)。ここではギリシア・ローマ世界の倫理思想における正義論の典型として、プラトンとアリストテレスの正義論を中心に検討することにする。

プラトンは正義を個人の倫理的行動を導く理念であると同時に、都市国家の構成原理の一つと考えている<sup>5</sup>。彼は正義を哲学的視点から考察し、「正義は魂の徳であり」、「義しい魂は善く生きる」、反対に、「不正 (アディコン) は悪徳であり」、「不正な人間は悪い生き方をする」と述べる (『国家』353e)。プラトンは人間のみならず都市国家も倫理的な存在であると考えており、正義 (ディカイオシュネー) を、知恵 (ソフィア)、勇気 (アンドレイア)、自制 (ソーフロシュネー) と並んで、国家が備えるべき主要徳目の一つに数えている (『国家』427e; 433d)。

アリストテレスはプラトンの正義論を継承して、正義を徳の一つと解釈した上で、正義に関する倫理的考察をさらに深化させている。正義は法に適った状態であり、不正は法に適わない状態である (『ニコマコス倫理学』1129a)。アリストテレスによると、正義は他の徳と並ぶ徳目ではなく、最も優れた「完全な徳 (テレイア・アレテー)」として、徳全体を体現するものである (1129b-1130a)<sup>6</sup>。正義が最も優れた徳とされるのは、正義が行為者個人の事柄に留まらず、他者に働きかけ、社会全体に善をもたらすものだからである (1130a)。尚、アリストテレスもプラトンの立場を継承して、国家も個人同様に倫理

1 “δίκη,” *The Brill Dictionary of Ancient Greek* (以下、BDAGと略記) 530; LSJ, 430を参照。

2 同上。

3 “δίκαιος,” BDAG, 529; LSJ, 429を参照。

4 “δικαιοσύνη,” BDAG, 529; LSJ, 429を参照。

5 G. Schrenck, “δίκη,” *TWNT* 2.181; B. Häggglund, “Gerechtigkeit VIII Philosophisch,” *TRE* 12.443-444; J. Reumann, “Righteousness (Greco-Roman World),” *ABD* 5.743.

6 G. Schrenck, “δίκη,” *TWNT* 2.182.

的存在であり、思慮、勇気、正義、自制を備えているべきであると考えていた（『政治学』1323b-1324a）。国家を支配する支配者も、これらの徳に従って統治することが大前提であるが、徳の具体的在り方は国情によって異なるとしている（『政治学』1277b）。

アリストテレスは二つの種類の正義を区別した。第一の正義は配分的正義であり、各人が自分に相応しい名誉や財貨を受け取ることを原則とする（『ニコマコス倫理学』1130b-1131a）。第二の正義は矯正的正義であり、ある人が自己に相応しい価値を奪われたときに適用される（1131b）。

正義を徳の一つとして数えるプラトンやアリストテレスの考え方は、ストア派の倫理思想にも継承され、例えば、エピクテトスは、美、善、節度と並んで正義を主要徳目として挙げている（エピクテトス『語録』1.221:2.17.6）<sup>7</sup>。

## 1.2 旧約聖書における正義（義）

旧約聖書において正義（義）の観念は動詞ツァーダク（צַדִּיק）、形容詞ツァディーク（צַדִּיק）、及び名詞ツェデク（צֶדֶק）、あるいは、ツェダカー（צֶדָקָה）によって表現される。動詞ツァーダクはカル態で、「義である」、「義しい」ことを意味する（創38:26;詩19:10:51:6:143:2;ヨブ4:17:9:2, 15, 20:10:15:13:18:15:14:22:3:25:4:33:12:34:5;イザ43:9, 26:45:25）<sup>8</sup>。この動詞は法廷的な性格が強く、ピエル態（エレ3:11;エゼ16:51, 52;ヨブ33:2:33:32）またはヒフィル態（出23:7;申25:1;サム下15:4;王上8:32;代下6:23;イザ5:23:50:8:53:11;詩45:5:82:3;箴17:15;ヨブ27:5）で「義とする」、「無罪と宣告する」の意味になる<sup>9</sup>。形容詞ツァディークは、法的、宗教的、倫理的に「義しい」ことを意味する（創6:9:20:4;申9:14:25:1:32:4;サム上24:18;イザ26:2:45:21;エゼ18:5, 9;詩1:9-10:7:10, 12;119:137:129:4:145:17）<sup>10</sup>。名詞ツェデクとツェダカーは、「正義」、あるいは、「義」を表し、両者はほぼ同義であるが、名詞ツェデクは規範に合致していることを表すのに対して（イザ51:1:64:4;詩23:3:119:21;ヨブ6:29）、ツェダカーは規範に合致した具体的行為を指す場合が多い（創15:6:18:19:56:1:58:2;申6:25;エゼ3:20:18:5, 19, 21, 22, 24:33:12;詩106:3:112:3, 9;箴11:16:15:9:21:21）<sup>11</sup>。ツェデクはミシュパート（「裁き」、「公正」、「正義」）と対で出て来ることがあるが（イザ16:5:32:1;エレ22:13;詩72:2:89:14:97:2;119:75, 121;箴1:3:2:9）、同様な傾向はツェダカーにも認められる（創18:19;イザ1:27:5:16:33:5:56:1;エゼ

7 G. Schrenck, “δικη,” TWNT 2.184.

8 “צַדִּיק,” DCH 7.79; HALT 1003; J. J. Scullion, “Righteousness (OT),” ABD 5.726; J. A. Ziesler, *The Meanings of Righteousness in Paul: A Linguistic and Theological Enquiry* (Cambridge: University Press, 1972) 20-21.

9 “צַדִּיק,” DCH 7.79-80; HALT 1003-1004; J. J. Scullion, “Righteousness (OT),” ABD 5.726-727; C. L. Irons, *The Righteousness of God: A Lexical Examination of the Covenant-Faithfulness Interpretation* (WUNT II 386; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2015) 121.

10 “צַדִּיק,” DCH 7.75-79; HALT 1001-1002; Ziesler, 18-20; B. Przybylski, *Righteousness in Matthew and his World of Thought* (SNTSM 41; Cambridge: Cambridge University Press, 1980) 9.

11 “צֶדָקָה צַדִּיק” DCH 7.80-88; HALT 1004-1005; B. Johnson, “צַדִּיק,” TWAT 6.912-913, 916; A. Jepsen, “צַדִּיק und צֶדָקָה im Alten Testament,” in *Gottes Wort und Gottes Land* (hrsg. v. H. G. Reventrow; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1965) 78-89; M. Weinfeld, *Social Justice in Ancient Israel and in the Ancient Near East* (Jerusalem: Magnes, 1995) 181-182; Irons, 110を参照。

18:5, 19, 21, 27:33:14, 16, 19:詩33:5:36:7:99:4:103:6:106:3:箴8:20:21:3)<sup>12</sup>。

旧約聖書の正義(義)の理解の出発点は、神は義であるということである(出9:27:申32:4:ネへ9:8:イザ5:16:26:7:41:10:45:13, 19, 21, 23-24:48:18:50:8:エレ12:1:哀1:18:ダニ9:7, 14:ホセ2:19:ゼファ3:5:詩7:10:11:7:37:6:;51:6:116:5:119:137:129:4:145:17:;代下12:6:エズ9:15:ネへ9:8, 33)<sup>13</sup>。義であることは、聖であることや(レビ19:1:イザ5:16:6:3)、真実(信実)であることと並ぶ(申32:4:ホセ2:20:ゼカ8:8:詩15:2:36:6:40:11:45:4:85:11:89:49:96:13:119:142:143:1:ネへ9:33)、神の重要な属性である。神の義は創造の業や(イザ45:8:詩33:4-6:85:12-13)、歴史における裁きの業を通して実現する(出23:7-8:;イザ10:22:ダニ9:14:詩7:12:9:5, 9:50:6:96:13:97:2:98:9:99:4:119:7, 62, 75:129:4:145:6-7)<sup>14</sup>。神の意思の具体的な表現である律法の戒めも神の義を反映する(申4:8:詩19:10:119:7, 62, 75, 106, 160, 164)<sup>15</sup>。他方、神の義はイスラエルに救いを与える恵みの業であるという側面を持っている(士5:11:サム上12:7:イザ32:16-17:41:10:45:8:51:5:54:17:56:1:61:10-11:62:1-2:63:1:エレ9:23:ダニ9:16, 24:ホセ2:21:詩24:5:31:2:33:5:35:28:36:11:40:10-11:48:11:65:6:71:2:72:1-4, 7:85:11-12:89:15:98:2:119:40-41:143:11)<sup>16</sup>。神は義であると同時に慈しみ深いからである(イザ30:18:エレ9:23:詩40:12:116:5-6:145:7-8, 17)。

人間の正義(義)について旧約聖書では、族長のノアが義人であるとされている(創6:9)。人間が義人であるということは、「神と共に歩み」(6:9)、「神の前に義しい」と主に認められるということの意味する(7:1)<sup>17</sup>。創世記の物語においてはさらに、高齢のアブラハムが子孫誕生の神の約束を信じたために、「義と認められている」(創15:6)<sup>18</sup>。アブラハムとその子孫であるイスラエルが神に選ばれた理由は、主の道を守り、正義(義)と公正を行うことであるとされている(18:19)。

申命記において、戒めを守ることは主の目に正しく、良いことであり、その履行に対して約束の地を継ぐことが約束されている(申6:18:24:10, 12-13)。イスラエルは命じられた通りに主の戒めを守って義と認められると告げられている(6:25)。

イスラエルの王政期において、王はその治世において正義と公正を行うことが期待されている(サム上24:18:26:23:サム下8:15:22:21, 25:王上10:9:イザ16:5:32:1:エレ22:3, 15-16:詩45:5:72:1-3, 7:89:15:99:4:箴8:15:16:12:25:5:31:9)<sup>19</sup>。正義と公正は神が王に付与する賜物である(詩72:1-2)。ダビデ

12 “צִדְקָה צִדְקָה” DCH 7.82, 85; Irons, 122.

13 N. Declaisse-Walford, “Righteousness in the OT,” NIDB 4.820.

14 Przybylski, 9-10; Irons, 135-162を参照。

15 N. Declaisse-Walford, “Righteousness in the OT,” NIDB 4.821; J. J. Scullion, “Righteousness (OT),” ABD 5.729.

16 B. Johnson, “צִדְקָה,” TWAT 6.903, 906; J. J. Scullion, “Righteousness (OT),” ABD 5.731-734; Ziesler, 29-30, 41-42; Irons, 144-151; J. Krasovec, “God’s Righteousness in the Original and Translations,” in *Reading from Right to Left* (FS. David J. A. Clines; eds. J. C. Exum and H. G. M. Williamson; JSOTSup 373; London—New York: Sheffield Academic Press, 2003) 268-270を参照。尚、P. Stuhlmacher, *Die Gerechtigkeit Gottes bei Paulus* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1965) 115-145は神の義が救いを創り出す力である側面を強調している。

17 Ziesler, 24-25もこの点に注目する。

18 Irons, 118-119は「神の前に義と認められる」という契機を強調する。

19 Irons, 115-116を参照。

は「御前に真実と義のうちに歩んだ」とされている（王上3:6;さらに、サム下8:15も参照）<sup>20</sup>。イザヤやエレミヤのメシア預言において、理想の王は正義と公正をもって国を治めることを通して平和を実現するものとされている（イザ9:6;11:4;エレ23:5;33:15）<sup>21</sup>。また、祭儀を司る祭司も「義を帯びる」ことが期待されている（詩132:9）。

預言書において、正義（義）はイスラエルが守るべき基本的な社会倫理の原則として強調される（イザ56:1;58:2;エレ22:3;31:23;エゼ18:5, 19, 21, 22;33:14, 16, 19;ホセ10:12;ゼファ2:3）。アモスはイスラエルに対して、「公正を水のように、正義（義）を尽きない川のように流れさせる」ことを勧める（アモ5:24;さらに、イザ48:18も参照）。イザヤやエレミヤの預言において、シオンの都であるエルサレムは、正義（義）と公正が宿るべきところとされている（イザ1:21, 26-27;5:7;28:17;32:16;33:5）<sup>22</sup>。他方、第二イザヤと第三イザヤの回復の預言において、神の義はしばしば救いをもたらす神の業について用いられる（イザ45:8;46:12-13;51:6, 8;54:14, 17;56:1;59:9;62:1-2;63:1）<sup>23</sup>。

知恵文学においては、正義（義）と知恵とが結び付き、正義（義）を行うことは、賢い者が行うべき基本的な倫理原則として推奨されている（箴1:3;2:9;8:20;21:3;詩119:121）。賢人は同時に義人である（箴9:9;11:30-31;23:24）<sup>24</sup>。義人（ツェダーキーム）はしばしば悪しき者（レシャーイーム）と対照される（詩1:5-6;11:5;37:12, 16, 17, 21, 33;125:3;140:1, 13;141:4-5;146:8-9;さらに、エゼ21:8も参照）<sup>25</sup>。義人は敬虔な者として神の律法を尊重し、戒めを守る（詩1:2;37:31）。神は義人に目を注ぎ（詩34:15;55:22）、その道を知っている（1:6）。義人は神に愛されて（146:8）、栄えるが（1:3;37:11, 26, 29;92:12-14;125:4）、悪しき者は裁きに耐えず、滅びる運命にあるとされる（1:5;37:28, 38;125:5）。

しかし、旧約聖書において、「人が神よりも義しいのだろうか？」（ヨブ4:17）、「人はどうして神の前に義しくありえようか？」（9:2;25:4）といった、神の前での人間の義に対する疑問が投げ掛けられることがある<sup>26</sup>。さらに、「善を行う者は一人もない」（詩14:3;53:1, 3）、「生ける者はすべて御前に義とされることがない」（143:2）といった懐疑的な見解も少数ではあるが表明されている。

### 1.3 初期ユダヤ教における正義（義）

中間時代のユダヤ教文書においても、正義（義）の概念は旧約聖書におけると同様に大切な役割を果たしている。正義論の出発点は、神は義であるということである（トビ3:2;13:6;14:7;IIマカ1:24;III

20 R. G. Smith, *The Fate of Justice and Righteousness during David's Reign: Narrative Ethics and Rereading the Court History according to 2 Samuel 8:15-20:26* (New York—London: T & T Clark, 2009) 42-64は、王が正義と公平をもって国を治めるという理念は、古代イスラエルのみならず、古代オリエント世界全体に見られることをアッカド語資料に基づいて指摘している。

21 Stuhlmacher, 135.

22 Smith, 61-62; C. Balogh, "He filled Zion with Justice and Righteousness," *Biblica* 89 (2008) 481-483.

23 J. Scharbert, "Gerechtigkeit I. Altes Testament," *TRE* 12.406-407, 409; Stuhlmacher, 136-141; Irons, 144-151; Krasovec, 264-265.

24 S. M. Lyu, *Righteousness in the Book of Proverbs* (FAT II 55; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2012) 52-56を参照。

25 B. Johnson, "צדק," *TWAT* 6.910, 918; N. Declaisse-Walford, "Righteousness in the OT," *NIDB* 4.822.

26 J. J. Scullion, "Righteousness (OT)," *ABD* 5.726.

マカ2:3;シラ18:2;知12:15;ソロ詩2:15, 18, 32:3:5:4:8:8:7, 23, 26:9:2:10:5;パル2:6:5:2;ヨベ1:25;21:4;エチ・エノ99:10;『宗規要覧 (1QS)』X 23;XI 15-16;『戦いの書 (1QM)』IV 6;XVIII 8;『感謝の詩編 (1QH)』VI 15;XX 31;『ダマスコ文書 (CD)』I 1;フィロン 『夢』II 194;『モーセの生涯』II 279;『逃亡』82;ヨセフ 『ユダヤ戦記』7.323<sup>27</sup>。神がなさる業は義しい (トビ3:2, 5;IIマカ9:18;12:6;シラ16:22;知5:17-18;12:16;ソロ詩2:10:3:3:4:8:5:1:8:8, 24:9:4-5;ヨベ22:15;エチ・エノ108:13;『宗規要覧 (1QS)』I 13, 21, 26;III 1;IV 4;IX 17;X 11, 23;XI 3, 16;『戦いの書 (1QM)』XI 14;『感謝の詩編 (1QH)』V 25;IX 6;XII 25, 40;XV 19;『ダマスコ文書 (CD)』III 15;XX 11, 29, 31, 33)。神の義は父祖たちに与えた契約を守る神の信実に基づいて置いている (IIマカ1:24-27;シラ16:22;ソロ詩9:10;10:4;ヨベ1:15-18;22:15;『宗規要覧 (1QS)』I 11-13;IV 6;IX 4-5;X 25;『戦いの書 (1QM)』IV 6;『ダマスコ文書 (CD)』III 13;VIII 15;XX 17)<sup>28</sup>。神の義は民に対する神の憐れみと表裏一体であり、救いを与える (トビ3:2;ソロ詩9:6-8;10:4;15:13;ヨベ1:15;31:24-25;エチ・エノ27:4;50:3-4;61:13;IVエズ8:11-12, 36;『宗規要覧 (1QS)』I 21-22;IV 4;XI 3, 5, 6, 12;『ダマスコ文書 (CD)』XX 20-22)<sup>29</sup>。特に、黙示的文書においては、終末の裁きにおける神の義の貫徹という主題が強調される (ダニ9:24;ヨベ23:26;エチ・エノ10:16-22;39:6;58:4;62:3;71:14;91:5-10;107:1;IVエズ7:33-35;ソロ詩17:21-29;ユダ遺22:1-2;ダン遺5:11-13;ゼブ遺9:8)<sup>30</sup>。義人は不義に満ちた現在の世においては苦しめられているが、終末時には究極的救いに入るという希望が述べられる (IVエズ9:13;ヨベ30:31;エチ・エノ10:17;48:7;62:13-16;92:1-4;『宗規要覧 (1QS)』XI 2-17;『ダマスコ文書 (CD)』XX 20)<sup>31</sup>。

初期ユダヤ教文書において人間の義とは、神の御心に適う行為のことである (トビ13:6;ソロ詩9:3-5;ヨベ20:9-10;35:2;エチ・エノ94:1-4;ダン遺6:10;『宗規要覧 (1QS)』I 1-6, 26;V 4;VIII 2;ヨセフ 『ユダヤ古代誌』13.289;『ダマスコ文書 (CD)』I 1)。義人は神の御心に従い義を行う道を歩む (トビ1:3:2;14:4:5, 6;14:8-9;ソロ詩8:6;14:1-3;18:8;ヨベ23:26;エチ・エノ82:4;92:3;94:1;99:10;『宗規要覧 (1QS)』I 13, 24;III 1;IV 2-3;IX 12-13;『ダマスコ文書 (CD)』I 16;『感謝の詩編 (1QH)』IX 36)<sup>32</sup>。義なる神が与えた戒めも義であり (アリストアス130-131)、戒めの遵守こそが義に至る道である (トビ4:5, 6;IVマカ13:24;ソロ詩18:8;ヨベ7:20;20:2-3;ダン遺6:10;エチ・エノ93:4;99:2, 10;『宗規要覧

27 本稿に引用する『感謝の詩編 (1QH)』の章節の番号は、F. G. Martinez/E. C. J. Tigchelaar (eds.), *The Dead Sea Scrolls Study Edition* (Leiden: Brill, 1997) に従っているため、以前に用いられていたSukkenikの番号とは異なっている。

28 E.P. Sanders, *Paul and Palestinian Judaism* (Philadelphia: Fortress, 1977) 387-409; Przybylski, 27-28を参照。

29 J. Reumann, "Righteousness (Early Judaism)," *ABD* 5.738; 尚、Stuhlmacher, 153-159は『宗規要覧 (1QS)』X 25; XI 12において「神の義」という表現が、救いを創り出す神の力を意味することを強調している。

30 J. Leonhardt-Balzer, "Righteousness in Early Jewish Literature," *NIDB* 4.808, 812; A. Dihle, "Gerechtigkeit," *RAC* 10.298-299; Irons, 228, 241-242.

31 Irons, 202-207; S. Hultgren, "Covenant, Law, and the Righteousness of God," in *From the Damascus Covenant to the Covenant of the Community: Literary, Historical, and Theological Studies in the Dead Sea Scrolls* (Leiden: Brill, 2007) 432-434.

32 C. A. Evans, "Fulfilling the Law and Seeking Righteousness in Matthew and in the Dead Sea Scrolls," in *Jesus, Matthew's Gospel and Christianity* (eds. D. M. Gurtner/ J. Willitts/ R. A. Burridge; New York—London: T & T Clark, 2011) 107-109.

(1QS)』I 13-14;『ダマスコ文書 (CD)』III 15:XX 27-28, 31-32)<sup>33</sup>。死海文書においては、神との契約に従ってその条項である律法を守ることが強調される (『宗規要覧 (1QS)』I 16:V 8;『ダマスコ文書 (CD)』XV 9-10;『感謝の詩編 (1QH)』VII 8-26)。クラン共同体の成員は「義の子ら」と呼ばれる (『ダマスコ文書 (CD)』III 20-22)。

マカベア戦争の時には、アンティオコス四世のヘレニズム化政策に抗して、父祖たちの伝えたユダヤ教の生活を維持するために荒野に逃れた敬虔な人々が「義と公正を求める多くの人々」と呼ばれている (Iマカ2:29)。神は義人を義とし、悪人を悪とするとされている (『ダマスコ文書 (CD)』IV 7)。他方、エチオピア語のエノク書や死海文書には深い罪意識の下に、義は神に属するのであり、人間は義を持たないという認識も見られる (バル1:15;エチ・エノ81:5;『宗規要覧 (1QS)』X 23-25;XI 20-21;『感謝の詩編 (1QH)』IV 20;VIII 18;XII 29-31;XIX 18)<sup>34</sup>。

初期ユダヤ教文書は、イスラエルの族長たちを模範的義人として挙げる：エノク (ダン遺5:6;ベニ遺9:1)、ノア (知10:4;シラ44:17;ヨセフス『ユダヤ古代誌』1.75, 99)、イサク (ヨベ31:23)、ヤコブ (知10:10)、ヨセフ (知10:13)。中でもアブラハムは、神によって義と認められた義人として (創15:6) しばしば言及されている (Iマカ2:52;知10:5-6;ヨベ14:6;23:10;フィロン『寓意的解釈』II 228;『相続人』94-95;『徳論』216)<sup>35</sup>。アブラハムが義と認められた根拠としては、神の言葉を信じたことよりも (創15:6)、創世記22章のイサクの奉献の出来事において試練に打ち勝ったことの方が強調されている (Iマカ2:52;知10:5;シラ44:19-21;ヨベ18:14-16)<sup>36</sup>。

中間時代の知恵文学においては、知恵と義は一体であり、正義と勇気の徳を知恵は教えるとされる (知8:7)。賢人と義人が同一視され、悪しき者たちと対照される (知5:6;10:6-9)。知恵の源泉は律法の学びである (IVマカ1:17-18;5:23-24)。義人と悪しき者たちの間にはこの世において対立があり、賢人である義人は悪しき者たちによって迫害されるが、神によって救われる (知2:12-20;5:1-7, 15-23;18:7;シラ35:22)<sup>37</sup>。義人には死後の安息が約束されている (知3:1-3;4:7-14)。

ヘレニズム・ユダヤ教には、ギリシア・ローマ世界の正義論を反映して、正義 (義) を社会生活において実践する徳として捉える傾向が強い<sup>38</sup>。知恵の書やIVマカバイ記やフィロンは、思慮と正義と自制と勇気を徳として列挙する (知8:7;IVマカ2:23;フィロン『世界の創造』73;『律法の寓意的解釈』I 63;III 77他多数)<sup>39</sup>。他方、知3:4, 9には希望と真理と愛の組み合わせが、シラ24:18には愛と畏れと知識と希望の組み合わせが、IVマカ17:2-4には信仰と希望と忍耐の組み合わせが見られ、ユダヤ教に固有な徳目の形成が見られる。初期キリスト教の伝統では、信仰と希望と愛をキリスト者の生きる基本姿勢を

33 Przybylski, 21-22.

34 Hultgren, 415-416, 433-435.

35 J. Leonhardt-Balzer, "Righteousness in Early Jewish Literature," *NIDB* 4.809-810.

36 Ziesler, 103-104; Irons, 215もこの点に注目する。

37 J. A. Linebaugh, *God, Grace, and Righteousness in Wisdom of Solomon and Paul's Letter to the Romans* (Leiden: Brill, 2013) 125-130.

38 A. Dihle, "Gerechtigkeit," *RAC* 10.305-306; Ziesler, 78, 81; Irons, 237-239.

39 他方、IV マカ1:6には正義と勇気が、1:10には思慮と正義と勇気が列挙されている。

示す三つの徳の一つとして挙げるが（Iコリ13:13:Iテサ1:3:5:8:エフェ1:15-18:コロ1:4-5:ヘブ10:22-24:黙2:19:バルナバ1:4, 6:ポリュ・フィリ3:3を参照）、これはヘレニズム・ユダヤ教の先行例に倣ったものであろう<sup>40</sup>。

ヘレニズム・ユダヤ教文献においても、旧約聖書におけると同様に（イザ9:6:11:4:エレ23:5:33:15）、為政者は義を愛し、正義（義）と公正に基づいた治世を行う理想が強調されている（知1:1:9:3, 12:アリスティアス209:;フィロン『律法各論』IV 164, 184;ヨセフス『ユダヤ古代誌』7.110:8.21）。マカベア戦争時に指導者のシモンは、正義と信実（信仰）を守ったので大祭司として立てられたとされている（Iマカ14:35）。

## 2. フィロンにおける正義（義）

### 2.1 語学的分析

フィロンにおいて使用される正義（義）に関するギリシア語は、名詞ディケー（δική）、または、その派生語の形容詞ディカイオス（δικαίος）や、名詞ディカイオシュネー（δικαιοσύνη）である<sup>41</sup>。

ディケー（「定め」、「正義」）はフィロンにおいて145の使用例があるが、主として「正義」（フィロン『酔い』30;『覚醒』6;『移住』225;『夢』I 94）、「裁判」（『モーセの生涯』I 55）、「判決」（『覚醒』223）、または、「刑罰」の意味で使用される（『不動性』34, 48, 76;『酔い』111, 135;『相続人』226;『徳論』42, 100他）。フィロンの使用例においてこの言葉は法廷的な意味が強く、裁きに関して「法と正義に従って（κατὰ νόμον καὶ δικήν）」という慣用語が使用される（『創造』46;『アブラハム』51;『言語の混乱』108;『移住』186;『十戒各論』I 14他）。

ディカイオス（「義しい」、「正しい」）はフィロンの著作に281回使用されている。神学的用法としては、神について「義しい」と述べる箇所がある（『酔い』81;『覚醒』10;『逃亡と発見』82;『夢』I 194;『アブラハム』232）。他方、ディカイオスは人間の宗教的・倫理的資質を描写する言葉として用いられ、神の前に相応しい歩みをする者が義人と形容されている（『律法の寓意的解釈』II 18;III 9, 10, 30;『徳論』182, 189;『フラックス』53, 126）。特に、ノアや（『悪は善を襲う』105;『カインの子孫』134;『巨人』3;『栽培』1, 141, 171;『相続人』260;『予備教育』90;『改名』189;『アブラハム』27, 31, 46）、アブラハム（『ケルビム』15;『移住』121;『相続人』94）等の族長たちが「義人」と呼ばれている。

ディカイオシュネー（「正義」、「義」）は、フィロンの著作において123回使用されている。ディカイオシュネーは人間が備えるべき徳の一つとして、フロネーシス（思慮）、ソーフロシュネー（自制）、アンドレイア（勇気）と並んで出て来る（『創造』73;『律法の寓意的解釈』I 63, 72;III 77;『ケルビム』5;『供え物』37;84;『カインの子孫』128;『農耕』18;『酔い』23;『改名』197;『モーセの生涯』II 185, 216;『律法

40 原口尚彰「パウロにおける愛の教説」『フェリス女学院大学キリスト教研究所紀要』第1号、2016年、28-29頁を参照。

41 動詞ディカイオオー（δικαίωω）はフィロンにおいて、「……することを正しいと考える」という意味でしばしば使用されるが（『悪は善を襲う』170;『神の不動性』159;『移住』73;『逃亡と発見』69;『アブラハム』142, 171;『モーセの生涯』I 44, 243, 311;『十戒総論』43他多数）、人間の宗教的・倫理的資質の形容としては使用されない。

各論』II 62:『賞罰』160)。他方、ディカイオシュネーはエウセベイア（敬虔）や（『ケルビム』96:『供え物』27:『悪は善を襲う』72, 73:『徳論』175:『賞罰』162:『摂理』67）、テオセベイア（敬神）と対になることもある（『律法各論』IV 134, 170）<sup>42</sup>。

## 2.2 正義（義）の源としての神

フィロンの正義論の出発点は、他の初期ユダヤ教文書と同様に（IIマカ1:24:シラ18:2:ヨベ1:25:21:4:『宗規要覧（1QS）』X 23:XI 20-22）、神が義なる存在であることである（『酔い』81:『覚醒』10:『逃亡と発見』82:『夢』II 194:『モーセの生涯』II 279:『アブラハムの生涯』232）<sup>43</sup>。神は出エジプトの際に「義しく、真実である審判者」として歴史に介入し、ファラオの軍勢を海に投げ込んで、イスラエルを救ったとされる（『酔い』111）<sup>44</sup>。

フィロンは創世記2章の楽園物語を寓意的に解釈し、エデンの園は神の知恵を表し、そこから湧き出る水を作る4つの川の流れは、それぞれ正義（義）や思慮や自制や勇気等の徳目を象徴すると考える（『律法の寓意的解釈』I 64-65）<sup>45</sup>。つまり、徳としての義は他の3つの主要徳目と同様に、神の知恵に起源し、人間の魂がそこから汲み取るものとされている<sup>46</sup>。神の知恵に関する泉の喩えはフィロンの他の著作にも見られ、神は「思慮と正義の永遠の泉」と呼ばれる（『律法各論』I 277; さらに、『律法の寓意的解釈』II 87を参照）。尚、神を正義（義）の源泉とみる考え方は、他のユダヤ教文書にも見られる（『宗規要覧（1QS）』XI 16）。

---

42 Ziesler, 106もこの点に注目する。

43 R. Barraclough, "Philo's Politics," *ANRW* II 21.1 (1984) 512-514.

44 Barraclough, 514; 尚、Irons, 258が、フィロンの義の理解が善には報いを悪には裁きを行う配分的正義に他ならず、義を救いとは考えていないと断じているのは、極めて一面的である。

45 フィロンの聖書釈義法の特徴については、J. Cazeaux, "Philon d'Alexandrie, exégète," *ANRW* II 21.1 (1984) 156-226; B. Mack, "Philo and Exegetical Traditions in Alexandria," *ANRW* II 21.1 (1984) 227-271; D. Dawson, *Allegorical Readers and Cultural Revision in Ancient Alexandria* (Berkeley—Los Angeles: University of California Press, 1992) 73-126; P. Borgen, *Philo of Alexandria: An Exegete for his Time* (SNT 86; Atlanta: Society of Biblical Literature, 1997) 46-79; idem., "Philo—An Interpreter of the Laws of Moses," in *Reading Philo: A Handbook to Philo of Alexandria* (ed. T. Seland; Grand Rapids: Eerdmans, 2014) 75-101; M. Böhm, *Rezeption und Funktion der Vätererzählungen bei Philo von Alexandria* (BZNW 128; Berlin—New York: de Gruyter, 2005) 38-116; A. Kamesar, "Biblical Interpretation in Philo," in *The Cambridge Companion to Philo* (ed. A. Kamesar; Cambridge: Cambridge University Press, 2009) 65-94; M. Hadas-Lebel, *Philo of Alexandria: A Thinker in the Jewish Diaspora* (trans. R. Fréchet; Leiden—Boston: Brill, 2012) 149-157; J. Danielou, *Philo of Alexandria* (trans. J. Colbert; Eugene, OR: Cascade Books, 2014) 90-110; M. L. Samuel, *Rediscovering Philo of Alexandria: A First Century Torah Commentator* (Volume I: Genesis; First Edition Design Publishing, 2017) 36-44を参照。

46 E. R. Goodenough, *An Introduction to Philo Judaeus* (New Haven: Yale University Press, 1940) 158もこの点を強調する。

## 2.3 賢人としての義人

義人は律法に従い、「正義（義）を追い求める」（申24:10）ものである（『悪が善を襲う』18;『アブラハム』242）。義しいことは、「神に喜ばれることである」（『改名』40）。他方、義人は「思慮深く、自制し、勇気ある」とされ、賢人の資質も併せ持っている（『悪が善を襲う』75）。これは、賢人と義人とを同一視する旧約聖書の知恵文学や（箴9:9;11:30-31;23:24）、ヘレニズム・ユダヤ教の知恵文学の（知5:6;10:6-9を参照）姿勢と一致しており、主知的な傾向を持つフィロンの倫理思想の特質を表している。

フィロンは人類の始祖アダムが、連れて来られた動物に名前を付けたことに注目して、アダムを賢人と呼んでいる（『世界の創造』148;『律法の寓意的解釈』II 15）。ユダヤ教の伝統ではモーセ五書の著作性がモーセに帰せられているが、フィロンはモーセを五書の著者としてしばしば賢人と呼んでいる（『律法の寓意的解釈』II 87, 93;III 45, 131, 140, 141;『移住』38, 168, 201;『相続人』21）。それはモーセが神の知恵を汲み取って著作をしたと考えられるからである（『律法の寓意的解釈』II 87）<sup>47</sup>。

フィロンが義人とされる人物を賢人と呼んだ例としては、ノアとアブラハムの例が挙げられる。ノアは旧約聖書において完全な義人であると述べられている（創6:9;7:1）。フィロンはそれに従い、ノアをしばしば「義人」と呼んでいる（『悪は善を襲う』105;『カインの子孫』134;『巨人』3;『栽培』1, 141, 171;『相続人』260;『予備教育』90;『改名』189;『アブラハム』27, 31, 46）。このことは同時代のユダヤ教文献に並行している（知10:4;シラ44:17）。フィロンに特徴的なことは、ノアを旧約聖書のように神に忠実な義人と理解するだけでなく、ヘレニズム世界の理想に従って徳のある賢人と理解していることである（『アブラハムの生涯』27）。ノアは「義人で、その世代にあって完全な者」（創6:9）であり、「神に喜ばれる者」であるが（『不動性』117）、同時に、徳を愛する者（フィラレトス）である（『アブラハムの生涯』27, 31）。「神に喜ばれる者」となることは、徳の完成が目指す最高の幸福な状態を表す（『神の不動性』118）。ノアは賢い義人として神の意思に適った徳を行うのである（『神の不動性』140;『栽培』171）。

フィロンはイスラエルの父祖アブラハムを「義人」と呼ぶ（『移住』110, 121;『相続人』94）。彼は創世記15章6節において、「アブラムは神を信じて、そのことが義と認められた」と述べられていることに注目する（『律法の寓意的解釈』III 228;『改名』177, 186, 218;『相続人』94）<sup>48</sup>。フィロンはアブラハムの信実（信仰）が義と認められたことを強調しているが（『相続人』94）、この点は新約聖書におけるパウロの発言に一致する（ロマ4:4-5;ガラ3:6-9）。しかし、業によらず信仰によって義とされたことを強調するパウロとは異なり（ロマ4:3, 5;ガラ2:16;3:2, 5を参照）、フィロンは信実（信仰）と業を対立させて考えず、アブラハムの義なる業にも言及する<sup>49</sup>。創世記22章にあるアブラハムのイサクの奉獻の行為を（創22:1-19）、フィロンは「神の前に喜ばれる」ことであると述べる（『改名』39, 40）。創世記22章のイサクの奉獻の出来事においてアブラハムが試練に打ち勝ったことを、初期ユダヤ教はアブラハムが義と認められた根拠であると考えている（『神の不動性』4;Iマカ2:52;知10:5;シラ44:19-21;ヨベ18:14-16）。初期ユダヤ教にとり、神への信実（信仰）と善き業は対立するものではない。神に喜ばれる善

47 Böhm, 60-61を参照。

48 七十人訳聖書の翻訳は特に断らない限り、筆者の私訳である。

49 Böhm, 162-163, 183; Samuel, 37-38.

き業（正義）は神への信実（信仰）の現れであり、両者は一体であると考えるのである（Iマカ14:35を参照）。

フィロンはアブラハムを義人とするばかりでなく、度々賢人と呼んでいる（『移住』94, 109, 122;『相続人』2, 88, 91, 258, 280, 313;『アブラハム』77, 80, 82, 84, 109, 118, 132;142, 168, 202, 213, 229, 255, 261, 272, 275）。人間のフロネーシス（思慮）の究極は、私たちが何も知らないことを知ることであり、神のみが知恵ある方であることを知ることである（『移住』134）。この立場は、無知の知を説いたギリシア哲学者ソクラテスの考えに近い（『ソクラテスの弁明』21dを参照）。自分の考えではなく、知恵の淵源である神の意思に従うことは、真の賢人と呼ばれるに相応しいということになる。彼はアブラハムの行動が神の意思に適っており、模範的であると考えて、「この賢人の行為は、神の言葉に他ならない」と述べる（『移住』130）。

## 2.4 徳としての正義（義）

プラトン以来のギリシア・ローマ世界の倫理思想の伝統に従って（プラトン『国家』427e;433dを参照）、フィロンはディカイオシュネー（正義）を、フロネーシス（思慮）、ソーフロシュネー（自制）、アンドレイア（勇気）と共に四大徳の一つに数える（『世界の創造』73;『律法の寓意的解釈』I 63;III 77;『ケルビム』5;『供え物』37;84;『カインの子孫』128;『農耕』18;『酔い』23;『改名』197;『モーセの生涯』II 185, 216;『律法各論』II 62;『賞罰』160<sup>50</sup>。さらに、正義は公平とも不可分の関係にあり、公平は正義の母であるされる（『律法の寓意的解釈』II 204;IV 230-231, 238;『栽培』122<sup>51</sup>）。フィロンの理解によれば、正義（義）は魂を愛し、不義は肉体を好む（『相続人』243）。正義は人間の魂の中で倫理的な力として作用し、欲望や悪の力を押さえ、倫理的な行動を生むのである（『律法の寓意的解釈』I 72;『世界の創造』81）。

## 2.5 敬虔と正義（義）

フィロンは、神へのエウセベイア（敬虔）、または、テオセベイア（敬神）と人への正義を倫理的生活の柱として挙げることもある（『ケルビム』96;『供え物』27;『悪は善を襲う』72, 73;『徳論』175;『賞罰』162;『律法各論』IV 134, 170;『摂理』67;さらに、『十戒総論』108-109;ヨセフス『ユダヤ古代誌』6.18:8.121, 314:9.16:10.50:18.117を参照<sup>52</sup>。父祖アブラハムの例に見られるように、神を敬うことは正義（義）に適っており、義人こそが神を敬うからである（『律法の寓意的解釈』3.9-10）。

敬虔はギリシア・ローマの倫理思想においても思慮や自制や正義や勇気と並ぶ主要な徳目となっている（プラトン『国家』1.331A;4.427E;10.615C;『法律』1.630B, 631B-D, 888BC;ディオゲネス・ラエルティ

50 H. A. Wolfson, *Philo: Foundations of Religious Philosophy in Judaism, Christianity, and Islam* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1948) 2.218; C. Lévy, "Philo's Ethics," in *The Cambridge Companion to Philo* (ed. A. Kamesar; Cambridge: Cambridge University Press, 2009) 150.

51 Stuhlmacher, 106; Irons, 256-257; Barraclough, 512もこの点に注目する。

52 Riesler, 106; D. Winston, "Philo's Ethical Theory," *ANWR* II 21.1 (1984) 395; Samuel, 89-90; G. Sterling, "The Queen of the Virtues: Piety in Philo of Alexandria," *SPA* 18 (2006) 103-123.

オス『哲学者列伝』3.80,83;7.92, 102;ストバイオス『抜粹集』2.60.9を参照)。この場合の敬虔とはギリシア・ローマ世界の神々に帰依し、仕えることである(プラトン『国家』10.615C;アイスキュロス『アガメムノン』338;ディオドロス・シクエロス『歴史叢書』4.39.1他)<sup>53</sup>。これに対して、ユダヤ人思想家であるフィロンにとって敬虔とは、天地の創造主なる唯一の神を信じることであり、オリュンポスの神々を信じることではない<sup>54</sup>。彼は旧約聖書に基づいて、神は唯一であり(『世界の創造』171, 172;『巨人』64;『言語の混乱』171)、創造主であり(『世界の創造』7, 13-15, 55;『律法の寓意的解釈』III 10)、信実である(『律法の寓意的解釈』3. 204;『改名』182)とする。また、世界は被造物であり、神と同視できない(『アブラハムの生涯』69)。同様に、ユダヤ人であり、キリスト者であるパウロにとって、敬虔とは天地の創り主なる神を敬い、仕えることであるので、異邦人世界の神々を敬うことは、むしろ、忌むべき偶像礼拝(出20:4-6;申5:8-11)であり、不敬虔且つ不義であり(詩73 [72]:6;箴11:5)、「不義をもって真理を妨げる」ことと評価される<sup>55</sup>。この点ではフィロンとパウロの間に立場の差はないと考えられる。

## 2.6 社会正義としての義

フィロンにおける正義(義)の概念は個人の生活を導く原則であるに留まらず、社会全体に影響を及ぼす社会倫理的な側面を持っている。例えば、係争の事件の審理を通して正義を実現する立場にある裁判官は、正義と真実に基づいて判決を下さなければならないことが強調される(『律法各論』IV 55-60)。裁判官は公正であり、賄賂を取ることなく、法に従って判決し、裁判において勝つべき者を勝たせ、負けるべき者を負かさなければならない(『律法各論』IV 62-64)。正義は裁判の審理を貫く指導原理となっている<sup>56</sup>。

国を統治する王は、正義(義)と公正に基づいた治世を行って平和を実現する責任があるが、それは被造世界全体を支配する王である神の統治にならったものである(『律法各論』IV 164)。この議論は王がその治世において正義と公正を行うべきであるとする旧約聖書の理念を継承・発展させたものであり(サム上24:18;26:23;サム下8:15;22:21, 25;王上10:9;イザ16:5;32:1;エレ22:3, 15-16;詩45:5;72:1-3, 7;89:15;99:4)、統治の原理としての正義ということを明確にしている。帝政ローマ期のアレクサンドリアのユダヤ人社会の指導者であったフィロンは、個人的生活における倫理原則のみならず、当時の公的な社会生活における倫理原則についても考察する必要があったのである。

## 2.7 正義(義)と人類愛

フィロンは人に対するディカイオシュネー(正義)とフィロンスローピア(「親切」、「善意」、「友好」、「人類愛」)を対で言及することがある(『改名』225;『アブラハムの生涯』208, 232;『モーセの生涯』II 9;

53 D. Kaufmann-Bühler, "Eusebeia," *RAC* 6 (1966) 985-1052を参照。

54 原口尚彰「アレクサンドリアのフィロンの幸福論」『教会と神学』第45号、2007年、29頁; K.-G. Sandelin, "Philo as a Jew," in *Reading Philo: A Handbook to Philo of Alexandria* (ed. T. Seland; Garand Rapids: Eerdmans, 2014) 23-24を参照。

55 原口尚彰『ローマの信徒への手紙 上巻』新教出版社、2017年、84頁を参照

56 Barraclough, 514-518.

『十戒総論』I 64;『律法各論』I 129;II 63)<sup>57</sup>。それは人に対して慈愛に富んだ正しい行為を生み出す内的動機を人類愛が与えると考えたからであろう。

フィロンは人類愛というギリシア的理念を倫理教説に取り込むにあたって、信仰に基づく神の模倣という神学的動機を重視する。神を信じる者は人類に対する神の愛（『ケルビム』99;『栽培』92;『夢』147;『アブラハムの生涯』79;『モーセの生涯』I 198;『律法各論』I 129;II 104;『徳論』80）の模倣として人間を愛することが求められる（『律法各論』IV 73;『徳論』168-169)<sup>58</sup>。神を敬うことと人類愛は対をなしており（『徳論』51）、モーセはその模範である（『徳論』66）。神への愛と人類愛はイスラエルが律法を通して教えられている善悪を判断する基準である（『自由論』83-84）。人類愛は世界を創造した神の法に従って生きる世界市民としての人間（『世界の創造』3, 142, 143;『混乱』106;『移住』59;『モーセの生涯』157;『律法各論』II 45）が備えるべき徳に他ならないのである（『徳論』51-174)<sup>59</sup>。このような見解は、律法に基づくユダヤ教的倫理教説をギリシア的理念によって再解釈し、普遍化する試みであると捉えられる<sup>60</sup>。

### 3. 結 論

第一に、フィロンの正義論は旧約聖書に基づき世界の創造主なる神の意思に基礎を置いている。神は義なる存在であり（『酔い』81;『覚醒』10;『逃亡と発見』82;『夢』II 194;『モーセの生涯』II 279;『アブラハムの生涯』232）、世界をその正義をもって治める（『酔い』111）。神の正義（義）は創造された世界に貫かれ、人間がその法に従うことこそが正義である（『悪が善を襲う』18;『アブラハム』242）。正義（義）の源泉は神の知恵にある（『律法各論』I 277;さらに、『律法の寓意的解釈』II 87を参照）。このことをフィロンは旧約聖書の寓意的解釈を通して立証しようとする（『律法の寓意的解釈』I 64-65）。

第二に、フィロンの正義論は主知主義的であり、賢人こそが義人であると考えられる傾向が強い。旧約聖書の中で神の前に相応しい歩みをしたノアは（創6:9）、義人であると共に賢人であるとされる（『神の不動性』140;『栽培』171）。神の言葉を信じた信仰故に義と認められたアブラハムも典型的な義人且つ賢人である（『移住』94, 109, 122;『相続人』2, 88, 91他）。

第三に、徳を重んずるヘレニズム世界の倫理思想の影響を受けて、フィロンには正義（義）を徳として解釈する傾向が強い。正義は思慮、自制、勇気と共に人間が遵守すべき四大徳の一つに数えられている（『世界の創造』73, 81;『律法の寓意的解釈』I 63, 72;III 77;『ケルビム』5;『供え物』37;84他多数）。

第四に、フィロンの正義論には社会倫理的な側面があり、正義は裁判や統治のような公的行為についても妥当する理念であるとされている。裁判官は正義と法に従って審理を進め、当事者に対して公正な判決を下すことが求められる（『律法各論』IV 55-64）。王は正義と公正を持った統治を行うことを理想

57 Wolfson, 2.219-220もこの点に注目し、そこにユダヤ教の倫理思想の影響を見ている。

58 Winston, 394-395, 398; P. Borgen, *Philo of Alexandria: An Exegete for his Time* (SNT 86; Atlanta: Society of Biblical Literature, 1997) 252-253; 原口尚彰「フィロンの愛の教説：パウロの教説との比較検討」『フェリス女学院大学キリスト教研究所紀要』第2号、2017年、22-23頁を参照。

59 Winston, 398-399.

60 Borgen, 59-62を参照。

とする（『律法各論』IV 164）。

第五に、フィロンは旧約・ユダヤ教的な正義（義）と愛の観念を、ギリシア的な人類愛の理念によって再解釈しており（『徳論』51-174）、民族主義的な倫理を越えて世界市民に相応しい普遍主義的な倫理の構築を目指している。

（はらぐち・たかあき）

フェリス女学院大学国際交流学部教授